

地域における子育て支援活動への“コミュニティ感覚”を取り入れた関与

大鐘 啓伸

Participation in “The Sense of Community” for Community Child Care and Family Support Activities

Hironobu OGANE

問題と目的

今日、地域を基盤としたコミュニティは社会的紐帯が著しく断片化されており、危機的な状況にある。日常の社会生活で感じるストレスや不安感が高くなっているが、それらを解消できるような身近での援助を得られる経験が不足しているからである¹⁾。そのような状況に対して期待されていることは、地域の住民がコミュニティという感覚を経験し、地理的な政治的基盤としてのコミュニティが再び形成されることである²⁾。

コミュニティという概念についての解釈は様々であるが、総務省³⁾は、行政区という地理的な政治的基盤をコミュニティとし、その課題に関して、行政と地域が協働し、それぞれの地域が必要とする公共的サービスの提供を行うこととしている。

コミュニティの危機に対する課題については、行政と地域との協働が求められており、そこに地域の住民のコミュニティ感覚が生成されることで、社会的に影響を与える活動が展開されるものである⁴⁾。つまり、コミュニティの形成は、まず、行政と地域の協働による地域活動が行われることである。そのような活動によって参加メンバーのコミュニティ感覚が高まっていくものである。次に、そのようなコミュニティ感覚の高まりは、行政と地域の双方にとってコ

表1 コミュニティ感覚尺度

| 要素 | 項目 |
|-----------|---|
| メンバーシップ | 私はこの地域に住む住人と顔見知りである。 この地域は、私にとって居心地がよい。 この地域の住人のほとんどが私のことを知っている。 |
| 影響力 | 私はこの地域の人々に私がどう思われているかが気になることがある。 私はこの地域のあり方に対して影響力をもっている。 この地域で何か問題が生じた時は、住人がそれを自ら解決することができる。 |
| 統合とニーズの充足 | この地域は私にとって住むのに適している。 この地域に住む人々は、皆同じ価値観を共有している。 私とこの地域に住む人々は、この地域に同じものを期待している。 |
| 情緒的結合の共有 | この地域に住むことは私にとって大切である。 この地域に住む人々はお互いに良い関係を保っている。 私はこれからもこの地域に住み続けようと思う。 |

コミュニティ活動を良好なものにする⁵⁾。平川⁶⁾は、行政と地域が協働することによって、互いのコミュニティ感覚を高め、その結果、共に成長して地域社会が変わっていくことを論じている。

Chipuer & Pretty⁷⁾ および笹尾⁸⁾は、コミュニティ感覚が人々の日常生活に密着した概念であり、行政と地域の協働に対して介入可能な方略を見出すことが課題と指摘している。

McMillan & Chavis⁹⁾の理論では、“メンバーシップ (membership) ”、“影響力 (influence) ”、“統合とニーズの充足 (integration and fulfillment of needs) ”、“情緒的結合の共有 (shared emotional connection) ”の4つの要素で構成される一つ概念が「コミュニティ感覚」であるとしている。この理論に基づき作成された“Sense of Community Index”^{10) 11) 12) 13)} (コミュニティ感覚尺度, 「SCI」と略記)は、コミュニティに関する研究のための尺度として使用されている(表1)。

内閣府¹⁴⁾は、子育て支援活動を行政と地域の協働によって取り組むものとして、それを重要な課題のひとつに挙げている。なお、地域の保育サポート活動は、子育て支援活動のひとつになるものである¹⁵⁾。この活動は、地域の相互の援助で成りたっているボランティア活動であり、地域の子育て支援の充実という役割がある¹⁶⁾。そして、この活動がコミュニティの中で社会的に影響を与える運動を展開していくためには、コミュニティ感覚が生成されることが必要であり、また、地域が行政との対等な立場での連携により取り組んでいくことによって目指すべきものである¹⁷⁾。

本研究は、筆者が、愛知県清須市(以下「市」と略記)の健康福祉部の職員として子育て支援活動について援助する業務を担う立場で、その所掌事務のひとつとして、地域で保育サポート活動を行っているグループと行政が協働して子育て支援活動を行った実践から、コミュニティの形成について検討するものである。また、本研究において、筆者は、子育て支援活動の業務として、地域のグループと行政との協働を進める過程の中で、グループのメンバーに対して、コミュニティ感覚を持つようにファシリテーションしたことから、コミュニティの形成へのコミュニティ感覚を用いた関与に効果があるかを検討するものである。

方 法

1. 研究対象

本研究の対象は、市にある4つの子育て支援グループである。市は大都市に隣接する人口約5万人のベッドタウンである。都市道路の整備や都市開発も進み、大企業の立地などもあり、女性の社会進出も進んでいる。市は旧新川町・旧清洲町・旧西枇杷島町の3つの町が合併して誕生したものである。

市の4つの子育て支援グループの状況は次のとおりであった(表2)。一つ目の子育て支援グループは、市が行っているファミリーサポートセンターであり、保育サポート活動を行っていた(以下「ファミリーサポートセンター」と略記)。ファミリーサポートセンターは行政によって設置され、運営はアドバイザーが中心となって会員相互の協力関係により行われていた。二つ目は、旧新川町のボランティアが地域の保育サポート活動として実施している地域の子育てサポートステーションA(以下「子育てグループA」と略記)であった。三つ目は、旧清洲町のボランティアが地域の保育サポート活動として実施している地域の子育てサポートグループB(以下「子育てグループB」と略記)であった。四つ目は、旧西枇杷島町のボランティアによった構成された子育て支援サークルC(以下「子育てグループC」と略記)で、地域の母親

表2 市の地域子育て支援グループの概要

| 子育て支援グループ | 特徴 |
|------------------------------|--|
| ファミリーサポートセンター | 市が増加する保育需要へ補完的に対応するため2008年に設置。乳幼児や小学生の児童を有する子育て中の労働者や主婦などを会員として、送迎や放課後の預かりなどの相互援助活動。 |
| 子育てサポートステーションA (子育てグループA) | 児童委員と子育てネットワークが中心となった保育サポート活動を行うボランティア・グループ。主にネグレクトを疑われる家庭のサポート。 |
| 子育てサポートグループB (子育てグループB) | 地域の学習塾の家庭教育活動を行う母親グループが母体となって保育サポートを行うボランティア・グループ。主に障害児の家庭のサポート。 |
| 子育て支援サークルC (子育てグループC) | 学校のPTA活動を通して参画した母親サークルが中心となったボランティア・グループ。家庭教育の学習会を通してのサポート。 |

サークルの活動のひとつとして保育サポートを実施していた。

なお、4つの子育て支援グループには、次のような課題がそれぞれあった。まず、ファミリーサポートセンターについては、初動期であることで、子育て支援活動をコミュニティのひとつとして展開するために今後どのように取り組んでいくかということであった。また、子育てグループA、子育てグループB、子育てグループCが旧3町地区におけるコミュニティ活動であったことから、市としては、並存する4つのグループ（ファミリーサポートセンター、子育てグループA、子育てグループB、子育てグループC）が連携・協働して、子育て支援システムを構成していくことが課題となっていた。子育てグループAと子育てグループBは、旧新川町、旧清洲町の保育サポートの実績について市から適切に評価されていないという思いを持っていた。また、市と協働することよりも、子育てグループAと子育てグループBが市の子育て支援システムの中心的な存在として活動することを望んでいた。子育てグループCは、ボランティア活動としての位置づけで独自の活動の維持を考えていたが、一方で、市から援助を受けることと市の子育て支援対策の策定への参画を希望していた。

2. 研究方法

(1) 関与の場と時期

子育て支援グループのそれぞれの課題に対応するため、筆者は、グループとの話し合いの場を設定した。そして、その場での話し合いを通して、コミュニティの形成を目指した。

筆者と子育て支援グループとの話し合いは、2008年4月から10月までに4回行った。1回目は2008年4月にファミリーサポートセンターの運営会議を行った。2回目は2008年5月にファミリーサポートセンター、子育てグループA、子育てグループBのメンバーと懇談会を行った。3回目は2008年7月にファミリーサポートセンター、子育てグループA、子育てグループB、子育てグループCのメンバーと連絡会議を行った。4回目は2008年10月に3回目と同様の連絡会議を行った。

(2) 関与の方法

関与の方法は、筆者がそれぞれの話し合いの場において、参加メンバーに対して、SCIの4つの要素（“メンバーシップ”，“影響力”，“統合とニーズの充足”，“情緒的結合の共有”）についての各項目の感覚を持つようにファシリテーションするというものであった。

4回の話し合いによって予測される過程は、まず、4つの子育て支援グループのメンバーが

コミュニティ感覚を高められることであった。そして、そのことによって行政と子育て支援グループが協働して、市の子育て支援システムを構成するために取り組むようになることであった。さらに、そのような子育て支援活動を通して、コミュニティの形成へと至ることであった。

(3) データの収集

データの収集には、その都度、話し合いの内容をICレコーダーに録音して、会議録を作成した。会議録から、話し合いの中で子育て支援グループの発言に対して、筆者がSCIの4つ要素についての各項目の内容を言葉にして関与した部分をまとめた。また、会議録から今後の子育て支援活動について言及された内容をまとめた。これを4つの話し合いごとに作成した。さらに、上記の話し合いによって実施された活動の実績についてまとめた。

結 果

1. ファミリーサポートセンター運営会議

ファミリーサポートセンターのコアメンバーであるアドバイザーと担当者には、ファミリーサポートセンターの当面の活動内容と地域の子育て支援グループとの連携・調整という課題に対処できるかどうかという不安が窺われた。したがって、不安を伴う課題に対して具体的にどのように取り組むかを検討する必要がある。そこで運営会議を行った。会議の概要は表3のとおりであった。

表3 ファミリーサポートセンター運営会議

| 時 期 | 2008年4月 (開催時間数1時間) | 参加者 | 市子育て支援所管担当者1人・筆者 ファミリーサポートセンターアドバイザー3人 |
|---|---|--|---|
| 関与前のアドバイザーの 主な発言 | 発言に対する筆者の関与の概要 | 関与後のアドバイザーの 主な発言 | |
| どのように運営していったらいいのかわかり、上手く実施していくにはどうしたらいいのかわかり。 | 「『地域住民と顔見知り』になるということが必要です。そのことは、地域との“メンバーシップ”の感覚がもてるようになることなので、そのために、啓発活動、イベントを実践すること」、そして「ファミリーサポートセンターとして『活動しやすいところ』にしていきたいと思います」とアドバイスした。 | 保育園や児童館を巡回して、ファミリーサポートセンターを紹介する啓発活動を始めたい。絵本の読み聞かせや人形劇などのイベントを私たちがやっていきたい。 イベントを通して、子育て中の母親や子育てに関心を持つボランティアが参加してもらえるようにしていきたい。 | |
| 地域の子育てグループと連携していくためには、どのような話し合いをすればいいのかわかり。 | 「子育て支援活動をするということは、その活動自体が『この地域のあり方に対して影響力』を持っていることなので、お互いのグループの“影響力”について、お互いに認識し合うことが必要です。そのために「お互いを認め合うための意見交換の場を設けること」、そのことで「市の『課題を自ら解決できるようになる』と思います」とアドバイスした。 | 複数の地域の子育てグループが連携して市の子育て支援に取り組んでいかなければならないと思います。子育てグループとの話し合いの場をつくりたい。 | |

アドバイザーからの「どのように運営していったらいいのか、上手く実施していくにはどうしたらいいのか」ということについて、筆者は、‘ファミリーサポートセンターが地域住民と“メンバーシップ”という感覚が持てるようにする必要がある’と考え、「まず、『地域住民と顔見知り』になるために、啓発活動、イベントを実践することで、育児に困っているお母さんや子育て支援をしたいと思っている方々に『ファミリーサポートセンターのことを知ってもらい』、『活動しやすいところ』にしていきましょう」とアドバイスした。また、アドバイザーの「地域の子育てグループと連携していくためには、どのような話し合いをすればいいのか」ということについて、筆者は、‘お互いのグループの“影響力”について、お互いに認識し合うことが必要’と考え、「子育て支援活動をするということは、その活動自体が『この地域のあり方に対して影響力』を持っていること」、「お互いを認め合うための意見交換の場を設けること」、「市の『課題を自ら解決できるようになる』こと」をアドバイスした。

この会議で取り組むことになった事項は、ファミリーサポートセンターが、保育園や児童館を巡回して、ファミリーサポートセンターを紹介する啓発活動を始めることであった。また、絵本の読み聞かせや人形劇などのイベントを開催して、そのイベントを通して子育て中の母親や子育てに関心を持つボランティアを募集することとした。そして、ファミリーサポートセンターのアドバイザーが調整役となって、子育てグループAと子育てグループBとの懇談会を開催することとした。

2. 子育てグループ懇談会

地域の子育て支援グループと連携・調整して、子育て支援活動に取り組むために、子育てグループAと子育てグループBとの懇談会を開催した。この会議の概要は表4のとおりであった。

子育てグループA、子育てグループBからは、これまで保育サポートという地域の子育て支援活動をしていた中で、行政に対する意見があった。懇談会は、その意見をファミリーサポートセンターのアドバイザーと担当者が聞くという形で進められた。

子育てグループAからは「これまで市の子育て支援活動を担ってきたので、その実践内容を市としても取り組んでいくべき」という意見が出された。筆者は、‘子育てグループAと子育てグループBが市の『お母さん方が子育てしてよかったと思えるように』活動しているので、それは『子育て支援を進める上で大切なことだ』というように、お互いのグループに“統合とニーズの充足”の要素があることを共感する必要がある’と考えた。そこで、「子育てグループAと子育てグループBの活動は、地域の子育て支援グループとしての良さがあがり、また、『市で活動することが適している』内容だと評価している。『子育てグループAと子育てグループBは市のお母さん方の子育てに影響がある』から『多くのお母さん方が子育てを自分でがんばってやっついこう』と思うことができるようになってきている」と話し、お互いのグループの活動が地域に“影響力”のあるということを明確化した。そして、3つの子育て支援グループが適切な保育サポートの運営に取り組んでいることについての話し合いをしていくようアドバイスした。

また、子育てグループBからは「母親教育もきちんとやらなければ、保育サポート活動ではないと考えているので、市も同様に取り組んでほしい」という意見が出された。筆者は、それぞれのグループが‘お母さん方が孤立しないようにお母さん同士で支援し合い、『市に住み続けようと思ってもらえる』ようにという“情緒的結合の共有”の要素を持っていることを明確化する必要がある’と考えた。そこで、「行政、子育てグループA、子育てグループBのそれぞれの子育て支援活動は、市に住んでいる『お母さん方がよい関係を持てるよう』になっていくための取り組みをしている」ので、さらに「行政、地域の子育て支援グループが協力して、子

表4 子育てグループ懇談会

| 時 期 2008年5月 (開催時間数2時間) | 参加者 市子育て支援所管担当者1人・筆者 ファミリーサポートセンターアドバイザー3人 子育てグループAコアメンバー3人 子育てグループBコアメンバー3人 | |
|---|--|---|
| 関与前のコアメンバーの 主な発言 | 発言に対する筆者の関与の概要 | 関与後のコアメンバー等の 主な発言 |
| これまで市の子育て支援活動を担ってきたので、その実践内容を市としても取り組んでいくべきである。(子育てグループA) | 「A・Bの活動は、地域の子育てグループとしての良さがあります。また、A・Bは『市で活動することが適している』と思います。A・Bは、市の『みんなが子育てしてよかったと思えるようになることを期待して』活動しています」と、A・Bの“統合とニーズの充足”を高める姿勢に共感した。また、「『A・Bは市のお母さん方の子育てに影響力がある』から『多くのお母さん方が子育てを自分でがんばってやっていこう』と思うことができるようになってきている」とお互いのグループの“影響力”を認められるように、A・Bのこれまでの実践活動を評価した。 | それぞれの子育てグループが良さをホームページで紹介することから始めたらいいのは。(ファミリーサポートセンター) A・Bが抱えている困難ケースを、子育て支援所管の家庭児童相談室に繋げていけば、地域と行政が協力して要保護家庭を支援できるのでは。(担当者) 母親支援を行政と協力してやっていければ、私たちががんばって援助が必要な家庭に積極的に関わっていきます。(子育てグループA) |
| 母親教育もきちんとやらなければ、保育サポート活動ではないと考えているので、市も同様に取り組んでほしい。(子育てグループB) | 行政とA・Bが、地域の子育て支援について、「地域の『お母さん方がよい関係を持てるよう』になって、孤立しないようにお母さん同士で支援していくことで、『市に住み続けよう』と思ってもらえる』ようになると思います」と、“情緒的結合の共有”の要素を高めるために、行政と協働した活動を提案した。 | 私たちの活動を市のホームページに紹介していただければ、参加されるお母さん方も増えて、そのことでお母さん方の仲間づくりもできるかもしれない。(子育てグループB) ホームページでの紹介だけでなく、いろんなことを一種に企画していきたい。(担当者、子育てグループB) |

育て支援に取り組んでいきましょう」と行政と協働した活動を提案した。

この会議で取り組むことになった事項は、市のホームページに子育てグループA、子育てグループBを紹介することであった。それは、市としての子育て支援活動の情報を広く住民に啓発するものであった。また、子育てグループA、子育てグループBが抱えている児童虐待などの困難ケースについては、担当者が所管する家庭児童相談室と連絡・調整をして、関係機関と連携した対応を行うこととなった。

3. 子育てグループ連絡会議(1)

子育て支援グループとの連携・調整をさらに進めるために、ファミリーサポートセンターは、子育てグループA、子育てグループB、子育てグループCとの連絡会議を開催した。この会議の概要は表5のとおりであった。

子育てグループAからは「市に対して意見を言えない人たちの話を聞いて、それを市に伝えることも活動の一つ」という意見が出された。筆者は、「『市のお母さん方の多くが子育てグループA、子育てグループB、子育てグループCのメンバーの誰かを知っている』ということは子育て支援にとって大切なこと」、「その活動に取り組めることは、地域の子育てグループと地域

表5 子育てグループ連絡会議

| | | |
|--|---|--|
| <p>時期 2008年7月 (開催時間数3時間)</p> | <p>参加者 市子育て支援所管担当者1人・筆者 ファミリーサポートセンターアドバイザー3人 子育てグループAコアメンバー3人 子育てグループBコアメンバー3人 子育てグループCコアメンバー3人</p> | |
| <p>関与前のコアメンバーの 主な発言</p> | <p>発言に対する筆者の関与の概要</p> | <p>関与後のコアメンバー等の 主な発言</p> |
| <p>市に対して意見を言えない人たちの話を聞いて、それを市に伝えることも私たちの活動の一つです。(子育てグループA)</p> | <p>「子育てグループと地域の住民が『顔見知りであり』、『市のお母さん方の多くがA・B・Cのメンバーの誰かを知っている』という“メンバーシップ”の関係性について評価した。</p> | <p>地域の情報交換の場を設けるために子育てネットワーク会議を開催しましょう。(担当者) 子育て支援に取り組んでいるところと交流できれば、どんなことをみんなが取り組んでいるかを知ることができて、一緒にがんばっていける。(子育てグループA)</p> |
| <p>母親たちのケアに対する機会を充実していく必要があります。(子育てグループB)</p> | <p>「『お母さん方は市に住むことが大切』であり、『住み続けたいと思う』ように、行政と子育てグループが協働していくことが大切」と、“情緒的結合の共有”の要素を高めるようにアドバイスした。</p> | <p>お母さん方が交流できて、子育ての勉強もできる子育て講演会を、子育てグループ合同で開催してはどうでしょう。(ファミリーサポートセンター) 子育てグループが合同で取り組んでいくことは、ぜひやっていきたい。公共施設のどこかで合同の子育て相談会も実施できないでしょうか。(子育てグループB)</p> |
| <p>子育て支援には、母親育ての視点や心の豊かさを育む取り組みが必要です。(子育てグループC)</p> | <p>「『お母さん方自らが、子育てのいろんな問題に取り組むことができる』ように子育て教室などを行政と子育てグループが協働で行うこと」をアドバイスした。また、「これまで子育て支援グループが行ってきた家庭教育活動がお母さん方の子育てに『影響力を持っている』」ことを評価した。</p> | <p>子育て支援対策の施策立案会議に、地域子育てグループの代表者をメンバーに加えていきたい。(担当者) 私たちのノウハウを生かす場ができれば、メンバーの活動にも励みになります。(子育てグループC)</p> |

の住民が『顔見知りである』ということ」を明確化し、“メンバーシップ”の関係性について評価した。

子育てグループBからは「母親たちのケアに対する機会を充実していくことが必要」という意見が出された。筆者は、「『お母さん方は市に住むことが大切』であり、『住み続けたいと思う』ように、行政と子育て支援グループが協働」して“情緒的結合の共有”に取り組むようにアドバイスした。

子育てグループCからは「子育て支援には、母親育ての視点や心の豊かさを育む取り組みが必要」という意見が出された。筆者は、「これまで子育て支援グループが行ってきた家庭教育活動がお母さん方の子育てに『影響力を持っている』」と評価し、「『お母さん方自らが、子育てのいろんな問題に取り組むことができる』ように子育て教室などを行政と子育て支援グループが協働で行うこと」をアドバイスした。

この会議で取り組むことになった事項は、地域の情報交換の場を設けるために子育てネットワーク会議を開催することであった。また、子育て支援グループの提案を反映して、グループ合同の子育て講演会の開催し、また、合同の子育て相談会を実施することとなった。さらに、子育て支援対策の施策立案会議に、地域子育て支援グループの代表者をメンバーに加えることとした。

4. 子育てグループ連絡会議 (2)

2回目の子育てグループ連絡会議の概要は表6のとおりであった。

子育てグループAからは「行政へのサービスに、保護者が過剰な要求を突き出すが、行政がいろんなことを聞いて、できることを取り組んだら、次は私たちがそれに応えないといけない」という意見が出された。筆者は、「行政の子育て支援も子育て支援グループの子育て支援も『同

表6 子育てグループ連絡会議

| | | |
|---|---|--|
| <p>時 期 2008年10月 (開催時間3時間)</p> | <p>参加者 市子育て支援所管担当者1人・筆者 ファミリーサポートセンターアドバイザー3人 子育てグループAコメンター3人 子育てグループBコメンター3人 子育てグループCコメンター3人</p> | |
| <p>関与前のコメンターの 主な発言</p> | <p>発言に対する筆者の関与の概要</p> | <p>関与後のコメンター等の 主な発言</p> |
| <p>行政へのサービスに、保護者が過剰な要求を突き出すが、行政がいろんなことを聞いて、できることを取り組んだら、次は私たちがそれに応えないといけない。(子育てグループA)</p> | <p>子育てグループが、行政と協働して活動することについて、「子育て支援への想いについては『同じ価値観を共有している』」、「市の子育て支援に『同じものを期待している』」と“統合とニーズの充足”を高める要素として評価した。</p> | <p>それぞれのグループが地域で担う役割や行政との連携について、話し合っていくために、子育て支援に関するアンケート調査を実施したらどうでしょう。(ファミリーサポートセンター) 地域の声を聞くことは大切なことなので、調査に協力していきたい。(子育てグループA)</p> |
| <p>行政が実施する子育て支援に多様なサービスを期待するが、個性的な取り組みが弱いし、融通が利かない。(子育てグループB)</p> | <p>「お互いの子育て支援の活動が『お母さん方にどう思われているかを気にしている』こと」、そして「A・B・Cが市の『子育て支援のあり方に影響力を持っている』ことを認識して、今後の活動を進めていきましょう」と“影響力”の要素を高めるようにアドバイスした。</p> | <p>保育サービスを柔軟に提供するために、ファミリーサポートセンターが地域の保育サポートグループの窓口になって、センター的な機能に取り組んだらどうでしょう。(担当者) いろんな保育サービスをみんなで協力して提供していければ、それぞれのグループの良さを発揮できると思います。(子育てグループB)</p> |
| <p>地域の子育て支援グループの良いところは、地域コミュニティとの繋がりが強く、個性的な教育が行われて、多様な子育て支援が期待できる。(子育てグループC)</p> | <p>子育てグループの良さを、行政との協働の中で継続的に推進するよう提案し、「『市でお互いがそれぞれの良さを生かして、子育て支援活動をすることは大切なこと』」であり、「『お互いの子育てグループが良い関係を保って』、『これからもお互いに子育て支援活動を続けていきましょう』」と“情緒的結合の共有”の要素を高めるようにアドバイスした。</p> | <p>今後に向けて、啓発パンフレットの作成、子育て相談ステーションの設置などについて、行政としてどのような支援をお願いできるでしょうか。(子育てグループC) 子育てグループとしてやっていった方がいいこと、行政として取り組んだ方がいいことをこれからもみんなで話し合っていきたい。(担当者)</p> |

じものを期待している』、『同じ価値観を共有している』と“統合とニーズの充足”を要素があることを評価した。

子育てグループBからは「お母さん方は、行政が実施する子育て支援に多様なサービスを期待するが、行政は個性的な取り組みが弱いし、融通が利かない」という意見が出された。筆者は、子育てグループA、子育てグループB、子育てグループCが市の『子育て支援のあり方に影響力を持っている』ことを認識し、お互いに連携して今後の活動を進めていきましょう」と“影響力”の要素を高めるようにアドバイスした。

子育てグループCからは「地域の子育て支援グループの良いところは、地域コミュニティとの繋がりが強く、個性的な教育が行われて、多様な子育て支援が期待できる場所」という意見が出された。筆者は、「『市でお互いに子育て支援活動をするのは大切なこと』」であり、「『お互いの子育て支援グループが良い関係を保って』、『これからもお互いに子育て支援活動を続けていきましょう』」と“情緒的結合の共有”の要素を高めるようにアドバイスした。

この会議で取り組むことになった事項は、行政と子育て支援グループの連携についての資料を得るためのアンケート調査を実施することであった。また、ファミリーサポートセンターが地域の保育サポートについての窓口になって、センター的な機能に取り組むこととなった。さらに、行政と子育て支援グループの協働を推進するために、行政はグループからの提案のうち、啓発パンフレットの作成、子育て相談ステーションの設置などについて予算に反映していくことにした。

5. 4回の会議によって実施された事業実績

4回の会議によって実施された事業等の実績は、表7のとおりまとめた。会議後実施された事業は、行政と子育て支援グループが協働して実施した子育て講演会など12事業であった。これまでの取り組みについて、各グループのコアメンバーからは、次の意見が出された。

ファミリーサポートセンターのアドバイザーの意見は、「お互いの考えていることや思っていることが、みんなで共有して、いろんな行事を一緒にやっていけるようになりました」であった。子育てグループAの代表者の意見は、「行政とファミリーサポートセンターが私たちの想いを聞いてくれるので、私たちががんばってやっていかななくてはと思っています」であった。子育てグループBの代表者の意見は、「地域で困っている人たちの対応について行政から協力が得られるようになった。困難ケースを私たちだけで抱えることがなくなりました」であった。子育てグループCの代表者の意見は、「行政でやれること、私たちでやれること、それらを連携していけることで、市として子育て支援が充実していくと思います」であった。

考 察

1. コミュニティ感覚の発達の生成

子育て支援グループに対してコミュニティ感覚を生成するための関与は、次のような段階的なものであった。

コミュニティ感覚は、当初、“メンバーシップ”の要素の項目をそれぞれのグループのコア・メンバーが持つことから始められた。そこでは、それぞれが地域に“影響力”の要素を持って取り組んでいることを評価した。そのことで、地域の子育て支援に向けてそれぞれのグループが協働して、地域の子育て支援活動を充実していくことの“統合とニーズの充足”の要素を共有す

表7 4回の会議によって実施された主な事業等

| 事業項目 | 事業概要 | 2008年度の実績概要 |
|----------------------------------|---|---|
| 絵本の読み聞かせの実施 | ファミリーサポートセンター主催。児童館、子育て支援センターなどで乳幼児を対象に絵本の読み聞かせ活動を実施して、ファミリーサポートセンターを啓発。 | 2008年5月から2009年3月まで毎月1回実施(年11回)。94組の親子参加 |
| 人形劇の開催 | ファミリーサポートセンターの啓発のために実施。子育て支援ボランティア・スタッフを募集。子育て支援ボランティア・スタッフと親子交流の場として活用。 | 2008年12月に開催(1回)。子育て支援ボランティア・スタッフ12人参加。参加親子180組。 |
| 子育て支援グループと家庭児童相談室との連携 | 子育て支援グループと子育て支援所管の家庭児童相談室が連携して、虐待ケース、障害児ケースについて連携して支援。 | 連携ケース数 6件。 |
| 市ホームページ掲載 | 子育て支援グループの活動等を市ホームページに掲載。 | 掲載開始2008年6月～。 |
| 子育てネットワーク会議の開催 | 保育園、児童館、子育て支援センターなどの子育て支援関係者の連絡会議に子育て支援グループを加えて実施。各機関などの子育て支援活動の内容についての情報交換。 | 2回開催(2008年10月、2009年2月)。 |
| 子育て講演会の開催 | ファミリーサポートセンターと子育て支援グループと共同で子育て講演会を開催。テーマは「親子のふれあいを深めるための手遊びと歌」。 | 1回開催(2008年9月)。参加親子56組。 |
| 子育て相談会の実施 | 子育て支援グループが交代で子育て支援センターの場を活用して子育て相談会を実施。 | 2008年10月から2009年3月まで毎月1回実施(年6回)。相談件数9件 |
| 子育て支援対策施設策立案会議への子育て支援グループの代表者の参加 | 子育て支援対策施設策立案会議への子育て支援グループの代表者が参加して、市の子育て支援施策に様々な提言を行った。 | 1回開催(2009年2月)。アンケート調査の実施が市次年度予算化。 |
| 保育サポート交流会の実施 | ファミリーサポートセンターと子育て支援グループが合同で資質向上のための保育研修会を実施。(研修テーマ：子どもの病氣。発達と支援。ひやりはっ) | 3回実施(2008年10月・17人参加、2009年1月・13人参加、2009年3月・14人参加)。 |
| ファミリーサポートセンターにおける保育サポートセンター機能の実施 | ファミリーサポートセンターが市の保育サポートセンター機能を持つために、保護者向けに4か所の保育サポートサービスを紹介する窓口を開設。 | 開設時期2009年1月～。 |
| 保育サポート啓発パンフレットの企画 | ファミリーサポートセンターと子育て支援グループの活動内容を啓発するパンフレットを企画。 | 発行回数3回の予定で市次年度予算化。 |
| 子育て相談ステーションの設置に向けた活動 | 子育て相談の拠点となる施設整備のために、子育てグループ連絡会議のメンバーと市長と懇談し、子育て相談ステーション設置について提言。 ↓ 市長懇談において発言されたこれまでの取り組みに関する意見 | 懇談回数1回(2009年3月)。実施計画調査費が市次年度予算化。 |

ることができるようになった。こうした要素を持って4つのグループが話し合うことによって“情緒的結合の共有”の要素に至るものと思われた。このことから、地域の子育て支援グループがコミュニティ感覚を高めて、地域の子育て支援活動を充実していくためには、段階的にコミュニティ感覚を生成していくように関与することが必要であった。

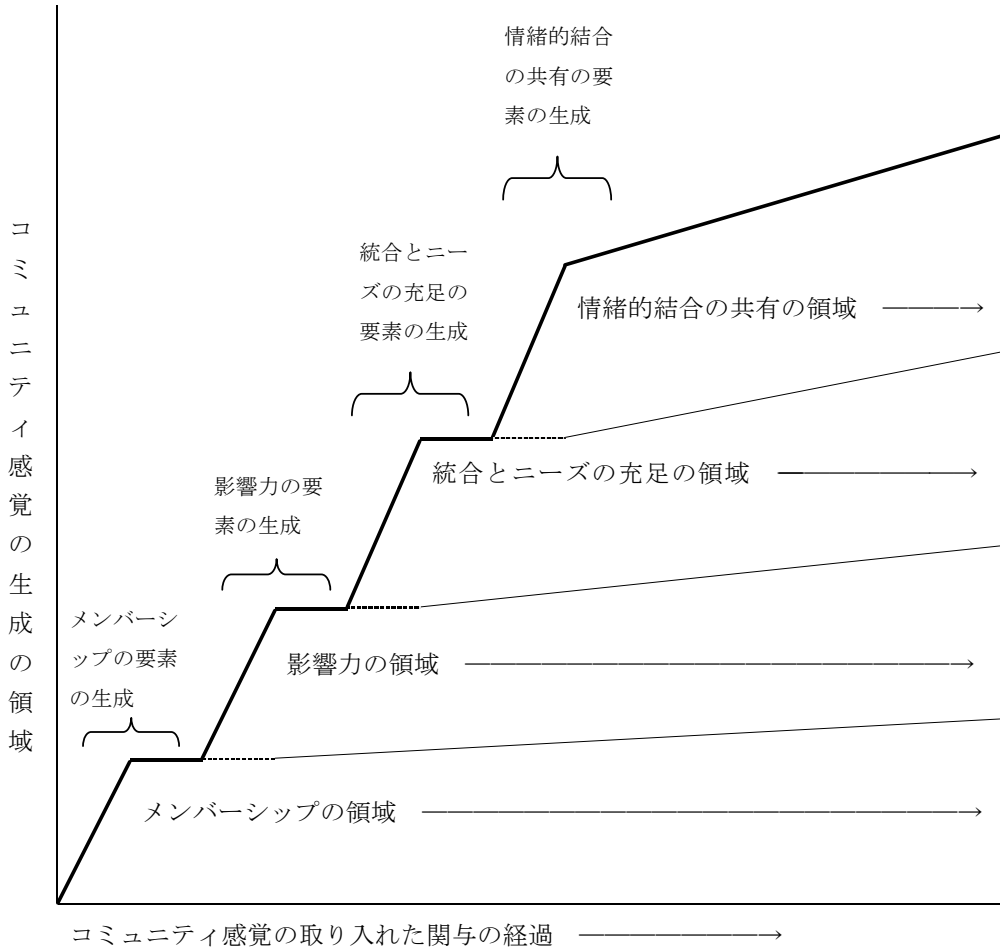


図1 コミュニティ感覚の生成について発達的に見た領域

しかし、子育て支援グループのコミュニティ感覚は段階 (phases) 的に生成していったものではなかった。それは図1のような領域 (domains) として発達的な様相で生成されていくものと思われた。最初の領域では“メンバーシップ”の要素の生成があり、その次に、子育て支援グループがこの地域のあり方に対して“影響力”を持っているという要素が生成されていくものであった。それらの感覚の領域から、“統合とニーズの充足”の要素が発達的に生成され、さらに、この3つの感覚を抱合して、“情緒的結合の共有”の要素の領域が生じてくると思われるものであった。そして、それぞれは相互に関係し合い、発達的により洗練され、成熟されたものになっていくものと考えられた。

2. コミュニティ感覚を持って対話することの意義

それぞれの子育て支援グループのコアメンバーに対して、コミュニティ感覚を構成する要素の各項目を言葉にして伝えたことは、コミュニティ感覚の各項目の感覚をコアメンバーの間で共有されていくものであった。そして、子育て講演会などの様々な事業を行政と子育て支援グループが協働して実施することができるようになったことで、コアメンバーのコミュニティ感覚が高まっていったものと思われた。

また、コアメンバーのそれぞれがコミュニティ感覚を持つことは、それぞれの課題解決に向け、すべての段階に関与するという参加型 (participatory) となり、地域コミュニティ・レベルでの解決策を探求するというものになった¹⁸⁾。そのことで、地域の子育て支援という帰属への期待が信じられるコミュニティの形成が起こっており¹⁹⁾、そして、コミュニティ感覚は帰属への期待が提供されることによって生成されるものであると考えられた。それは、子育て支援という同じ価値観を共有することに帰属できるコミュニティの形成であると言えるのであろう。

行政とそれぞれの子育て支援グループとは、対話という過程を経て、それぞれの心理的距離が近くなっていくものであり、そのような近接性はコミュニティ経験にとって重要であった。また、話し合いを重ねることによって、子育て支援グループはお互いの影響力を評価できるようになり、それぞれがコミュニティ感覚の柔軟性²⁰⁾に富んできていることを確認できるものと思われた。

3. 行政と地域との協働におけるエンパワーメント

行政と子育て支援グループが協働して様々な事業を展開したことは、コミュニティ感覚に基づく関与によって、グループとして、個人としてエンパワーメントされたからであるということも考えられた。エンパワーメントとは、市民参加と社会的な相互作用を通して、個人やグループが力を付けていく過程である²¹⁾。また、市民参加によって地域が連携することは、個人とコミュニティがエンパワーメントされ、そのことがお互いのコミュニティ感覚を高めていくものである²²⁾。行政と地域が協働することによるエンパワーメントは、単一性の動きではなく、双方向でエンパワーメントし合うもので、結果として、地域の子育て支援の質を向上させるものであった。それは、地域が行政との対等な立場での連携により取り組んでいくことを目指した成果でもあったと思われた。

地域の子育て支援のシステムの構成には、エンパワーメント・プロセスが核となることで、地域の子育て環境が促進するものである²³⁾。当然、保育サポート事業という子育て支援においても同様の過程をたどることで、それぞれのグループが、地域の子育て支援としての役割をお互いに確認し合って取り組んでいけるものであろう。そして、コミュニティ感覚を生成することは、個人・組織・コミュニティの3層にわたってエンパワーメントされるとともに、コミュニティ・レベルでは社会的に影響を与える運動を展開していくことが期待されるプロセスである²⁴⁾。

まとめ

本研究から、SCIを構成する4つの要素を用いた関与は、次のような効果が期待できると思われた。

“メンバーシップ”は、行政と子育て支援グループが地域の一員であるという感覚を促すもの

であった。“影響力”は、行政と子育て支援グループが地域の一員として地域の子育て支援活動が役立っているという感覚を促すものであった。“統合とニーズの充足”は、行政と子育て支援グループが地域の子育て支援活動の課題と一緒に取り組んでいこうという感覚を促すものであった。“情緒的結合の共有”は、行政と子育て支援グループが地域の子育て支援という同じ目標に向かって取り組んでいるという感覚を促すものであった。

コミュニティ感覚が高まることは、グループ同士が影響を与え合い、お互いに意思決定をしながらエンパワーメントされていくものである。そのような過程によって、行政と子育て支援グループが協働して様々な子育て支援活動を展開していったことは、地理的な政治的な基盤としてのコミュニティの形成に向けた取り組みになるものと考えられた。

本研究で関与した子育て支援グループ等は、地域活動を行っているという意識が高いと思われ、そのことが影響して、4回の話し合いだけで、様々な成果が得られたのであろう。今後は、コミュニティ感覚についての質的研究がさらに継続的に行われるとともに、量的研究を合わせた取り組みが必要である。

引用文献

- 1) Delanty, G. 2003 COMMUNITY. London : Routledge(山之内靖・伊藤茂(訳) 2006 コミュニティ・グローバル化と社会理論の変容. NTT出版社)
- 2) 前掲書, 1)
- 3) 総務省 2008 平成20年版地方財政白書 日経印刷.
- 4) 山本和郎 2001 臨床心理学的地域援助とは何か-その定義・理念・独自性・方法について 山本和郎(編) 臨床心理学的地域援助の展開-コミュニティ心理学の実践と今日的課題 244-256. 培風館.
- 5) 平川忠敏 2007 家庭・地域社会領域での実践 (9) ボランティア活動とコミュニティ感覚 日本コミュニティ心理学会(編) コミュニティ心理学ハンドブック, 617-621. 東京大学出版会.
- 6) 前掲書, 5)
- 7) Chipuer, D. M. & Pretty, G. M. H. 1999 A review of the sense of community index : Current uses, factor structure, reliability and future development. *Journal of Community Psychology*, 27, 643-658.
- 8) 笹尾敏明 2007 コミュニティ感覚 日本コミュニティ心理学会(編) コミュニティ心理学ハンドブック, 115-129. 東京大学出版会.
- 9) McMillan, D. W. & Chavis, D. M. 1986 Sense of community : A definition and theory. *Journal of Community Psychology*, 14, 6-23.
- 10) 前掲書, 9)
- 11) 前掲書, 7)
- 12) Long, D. A. & Perkins, D. D. 2003 Confirmatory Factor Analysis of the Sense of Community Index and Development of a Brief SCI. *Journal of Community Psychology*, 31, 279-296.
- 13) 笹尾敏明・小山梓・池田満 2003 次世代型ファカルティ・ディベロップメント (FD) プログラムに向けて-コミュニティ心理学的視点からの検討 教育研究 (国際基督教大学), 45, 55-72.
- 14) 内閣府 2007 平成19年版少子化社会白書 ぎょうせい.
- 15) 三沢直子 2001 地域における子育て支援活動 山本和郎(編) 臨床心理学的地域援助の展開-コミュニティ心理学の実践と今日的課題 67-87. 培風館.
- 16) 山路憲夫 2003 ファミリーサポートセンターを中心とした子育て支援の現状と課題-東京都内の主要都市の事例から 白梅学園短期大学教育福祉研究センター研究年報, 8, 16-25.
- 17) 中谷奈津子・橋本真紀・西村真実 2008 子育てネットワークと行政との関係に関する研究-エンパワーメントプロセスからの分析- 厚生指針, (55) 2, 16-23.
- 18) Friedmann, J. 1992 EMPOWERMENT The Politics of Alternative Development. Basil Blackwell Ltd (斉藤千宏・雨森孝悦(監訳) 1995 市民・政府・NGO-「力の略奪」からエンパワーメントへ. 新評論)

- 19) 前掲書, 1)
- 20) 前掲書, 1)
- 21) 前掲書, 18)
- 22) Dalton, J. H., Elias, M. J. & Wandersman, A. 2001 Community Psychology : Linking individual and communities. Wadsworth.
- 23) 尾形由起子・山下清香・山野理恵・井上恵理 2006 K町における地域子育て支援システムの構築－3地区のエンパワメント・プロセスを通して 保健師ジャーナル, (62) 11, 976-981.
- 24) 前掲書, 4)

謝 辞

各子育てグループおよび関係者の方々には、懇談会の内容を本論文にすることについてご快諾賜り深く感謝申し上げます。

Abstract

This study was conducted to raise the sense of community for administrative and child care and family support groups. Another aim was enhance collaboration in the substantial child care and family support activities in the community. The purpose of this work was to consider the effect of "participation". Four elements ("membership", "influence", "integration and fulfillment of needs" and "shared emotional connection") of the sense of community by McMillan & Chavis (1986) were used as items for the participation. The participants met four times for participation in the administrative and child care and family support groups. The results, suggested that a sense of community was generated by the development of this participation program. Furthermore, the sense of community was promoted by the dialog. It was assumed that such participation can be used for formation of a community which can share the sense of values. Moreover, empowerment of the individual, group, and the community was expected as a consequence of the participation activities.

Keyword : child care and family support activities, sense of community, collaboration, empowerment

キーワード

子育て支援活動, コミュニティ感覚, 協働, エンパワメント